

## 「旅立ちの日に」

おはようございます。

3月19日の卒業式まで、残すところあと30日となりました。私は、毎年この時期になると、「旅立ちの日に」が卒業式でなぜ歌われるようになったのかという話をしています。先週、東村山市立第一中学校で東京都中学校音楽教育研究会の研究発表会があり、この曲をアレンジした松井孝夫先生にお会いしました。現在、大学の准教授をされている松井先生とは、葛飾区と板橋区で中学校の音楽の先生をされていたときに、共に音楽教育の研究をした仲だったので、この作品ができた当時のことをよく思い出します。

この曲の作詞者は、埼玉県秩父市にある影森中学校の小嶋登校長先生です。残念ながら小嶋校長先生は、昨年1月にお亡くなりになり、「旅立ちの日に」が卒業式で歌われるようになった訳が放送されました。時期を同じくして、テレビのコマーシャルでSMA Pがこの曲を歌っていました。「そういえば！」と思い出した人もいるかもしれませんね。

さて、この「旅立ちの日に」が生まれたのは、今から22年前の平成2年、影森中学校の三年生を送る会で、小嶋校長先生が作詞をして、音楽の坂本先生がメロディーと伴奏を作曲しました。本当は、先生たちから卒業生に贈る一回きりの歌だったそうです。しかし、その年の春、先ほど紹介した松井孝夫先生によって混声三部合唱にアレンジされ、各地の合唱の指導者講習会で発表され、全国に広がり、現在では小中学校の卒業式で一番歌われる曲となりました。

当時の影森中学校は、いじめや校内暴力など生活指導が大変な学校で、生徒たちの心も暗く、校歌も半分くらいの生徒しか歌わない状態だったそうです。「歌が歌えないのは心が不健康だから」と考えた小嶋校長先生は、なんとか学校の雰囲気を変えようと、「今日から歌声の響く学校を目指そう」という取り組みが始まりました。最初は、なかなかうまくいかず、坂本先生も泣きながら生徒に向かい合うこともあったようです。しかし、「歌うことは恥ずかしい」から「歌うことって気持ちいい」と変わるように熱心に取り組み続けた結果、徐々に生徒たちに変化が現れてきたそうです。生徒たちの心に素直に入っていったこの曲を、今度は生徒が卒業する際に歌うようになり、「歌声の響く学校」に変わっていきました。

私は、2番の歌詞の「意味もないいさかいに ないたあの時 ころるかよったうれしさに抱き合った日よ」にこの校長先生の思いを強く感じています。そして、伝えたいことがあれば、言葉だけではなく、それをメロディーに託すことによって、より強く伝えることができる音楽って本当に素晴らしいものだなとあらためて思いました。

今年も本校の三年生を送る会や卒業式で、この「旅立ちの日に」を歌います。今日の私の話を心の片隅において、3年生は向中で過ごした3年間を思い、1・2年生は先輩たちとの思い出を胸に、「歌うことって気持ちいい」と思えるくらい体育館いっぱい響き渡る歌声で、心を込めて歌ってください。